

修士論文(要旨)

2012年2月

外来語に見られる開音節化規則の習得
—中国語母語話者への調査に基づいて—

指導 佐々木倫子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

210J3004

顧冰馨

目次

第1章	はじめに	1
1.1		
	研究の背景	1
1.2		
	研究の目的	2
第2章	先行研究	3
2.1	外来語について	3
2.2	日本語化について	3
2.3	開音節化について	4
2.4	日本語化規則の習得について	5
2.5	先行研究に残された課題	6
第3章	調査の概要	7
3.1	調査協力者	7
3.2	調査内容	8
3.3	調査方法	10
第4章	計量的分析と考察	10
4.1	単語レベルでの成績	10
4.2	規則レベルでの成績	11
4.3	チェックポイントに基づくS-P表の作成	11
4.4	S-P表に基づく分析. 考察	12
4.4.1	S-P表のパターン	12
4.4.2	S曲線、P曲線に基づく分析. 考察	12
4.4.3	差異係数D*に基づく分析. 考察	14
第5章	開音節化規則の誤用分析. 考察	15
5.1	例外規則の未習	15
5.2	日本語化ルートの間違い	20
5.3	母音の長、短音の弁別困難	24
5.4	音節脱落	31
5.5	英語誤発音の干渉	34
5.6	異なる母音の添加/挿入	35
5.7	記入ミス	37
第6章	開音節化に見られる表記の問題	39
第7章	総合的考察	43
第8章	まとめと展望	46
	参考文献	

要旨

日本語の外来語は8割以上が英語からの借り入れであり、しかも一定の規則に基づく体系的な日本語化が行われている(カッケンブッシュほか 1993)。開音節化はその中の一つである。一方、英語教育が盛んに行われている中国では、たとえ英語専攻の学生でなくても、英語を学ぶことは大学時代の最も重要な課題の一つである。もちろん、日本語を専攻とする学生も例外ではない。そこで、日本語を学習している中国語母語話者は、同時に英語を勉強しているうちに、外来語の開音節化規則を内在的に構築しているのではないかと推論した。さらに、英語を原語とする外来語の日本語化規則が、どのように中国人学習者の中で構築されているかを見ることにより、中間言語の一端が明らかにできると考えた。本研究では、中国人学習者がどのように日本語化規則を内在的に構築しているのかを開音節化規則を中心に考察する。

調査は、中国 A 大学に在学する「日本語専攻(JP)」(日本語を第一外国語とする)4年生 92名、「日英ダブル言語専攻(JE)」(日本語を第二外国語とする)4年生 40名を対象に、22個の英単語を提示して、それらを外来語としてカタカナで表記してもらう方法で行った。規則の内在化の有無をみるため、調査語は調査協力者にとって外来語としては未習であり、しかも日常生活で遭遇しにくいものに限った。

解答を分析し、単語レベルと開音節化規則レベルでの成績を算出した結果、開音節化規則は他の日本語化規則より習得されやすいことが判明した。また、調査語の語彙も、開音節化規則も、JPはJEより習得が進んでいることが分かった。これにより、日本語に接触する時間が長い、または、日本語レベルが高いといった要素は日本語化規則の習得に有利であることが、結論付けられた。一方、規則レベルでの正答率をデータベース化し、それに基づいて S-P 表を作成した結果、差異係数 D^* の算出により、調査協力者および調査項目が高い等質性を持っていることも分かった。

さらに、解答に表れた誤用に焦点をあてその原因を分析した。結果としては、1) 例外規則の未習 (brake→ブレーク)、2) 日本語化ルートの間違い (catch-up→キャットアップ)、3) 母音の長、短音の弁別困難 (incentive→インセンティブ)、4) 音節脱落 (private→プライ)、5) 英語誤発音の干渉 (arrange→アリンゴ)、6) 異なる母音の添加 (royal→レオイレ)、7) 記入ミス (presence→プレゼント) といった 7 類に誤用が分類できた。誤用の分類によって、中国語母語話者が英単語を開音節化する際の誤用の特徴が一目瞭然となった。

また、独特の中間言語の検出により、中国語母語話者が自らのルールに従って開音節化規則を習得していることが明らかになった。これは先行研究で述べられた英語母語話者など他の多くの学習者に共通する特徴だと分かった。さらに、調査協力者の外来語表記を考察した結果、揺れ、長音表記、同音異形の仮名表記に関する問題点が見られた。

本研究で明らかになった開音節化規則の習得特徴、誤用種類及び表記の問題点を教師側で把握することは、効果的な外来語指導に繋がると思われる。指導する際に、学習者が日本語化規則に対する興味と関心を持つように導くことをつねに念頭に置くことが肝心だと思われる。さらに、学習者の学習タイプ、英語レベルを配慮しながら指導する必要性もあろう。

なお、本研究では習得の実態だけを考察した。学習者が外来語の日本語化、または日本語化規則の応用に対してどのような考えを抱いているのかなどについて、学習者へのインタビュー調査が実施できな

かったことが反省すべき点である。さらに、合計六つの規則が含まれる日本語化規則の中で、開音節化規則だけに焦点を当てたため、日本語化規則習得の全体像が掴めないという限界も実感した。この二点を今後の課題として検討したい。

【参考文献】

- 茜八重子 (1998) 「外来語のカタカナ表記における中間言語分析について」『大東文化大学語学教育研究論集』第 15 号 (pp. 161-174)
- 茜八重子 (1999) 「日本語学習者に見られる外来語表記の誤りについて—開音節化の規則体系がどのように片仮名表記に表れるか—」『講座日本語』第 34 号 (pp. 85-105)
- 石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』東京堂出版 (pp. 58-79)
- 大曾美恵子(1991)「英単語の音形の日本語化」『日本語教育』第 74 号、日本語教育学会
- カッケンブッシュ寛子, 大曾美恵子 (1990) 『外来語の形成とその教育』(日本語教育指導参考書 16) 国立国語研究所
- カッケンブッシュ寛子ほか (1993) 『日本語教育のための外来語学習支援CALLシステムの開発. 研究』研究報告書 平成 2-4 年度 文部省科学研究費補助金一般研究 (B)
- カッケンブッシュ寛子 (2008) 「外来語研究の視点—日本語教育の立場から—」『日本語教育と音声』 (pp. 91-96)
- 門田修平(2010) 『SLA 研究入門：第二言語の処理. 習得研究のすすめ方』くろしお出版 (pp. 5)
- 小林ミナ(1997) 「日本語学習者は英語をどう開音節化するか—英語を母語としない初級学習者の場合—」『北海道大学留学生紀要』第 1 号 (pp. 54-66)
- 小林ミナ(1998) 「日本語学習者は語末の t/d をどう開音節化するか」『北海道大学留学生センター紀要』第 2 号 (pp. 75-86)
- 小林ミナ. カッケンブッシュ寛子. 深田淳 (1991) 「外来語に見られる日本語化規則の習得—英語話者の調査に基づいて」『日本語教育 74 号』日本語教育学会 (pp. 48-59)
- 小林ミナ. カッケンブッシュ寛子(1999) 「Acquisition of Japanization Rules in Loanwords: A Case of English and Non-English Speakers」『第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究』 (pp. 97-111)
- 国立国語研究所(1962-64) 『現代雑誌九十種の用語用字』秀英出版.
- 佐藤隆博 (1975) 『S-P 表の作成と解釈～授業分析. 学習診断のために～』明治図書
- 佐藤隆博(1976) 『CMI システム—教育におけるコンピュータ利用—』社団法人電子通信学会 (pp. 175)
- 佐竹秀雄(1986) 「外来語表記法の問題点」『論集日本語研究 1』明治書院 (pp. 407-422)
- 齊藤倫明 (2002) 『朝倉日本語講座. 語彙. 意味』朝倉書店
- 陣内正敬(2006) 「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』第 11 号、関西学院大学
- 玉村文郎(1991)「日本語における外来語要素と外来語」『日本語教育』第 74 号、日本語教育学会
- 張金龍(2006) 「外来語の日本語化規則の習得について—中国語母語話者を対象に—」
「対話と深化」の次世代女性リーダーの育成：「魅力ある大学院教育」イニシアティブ、平成18年度活動報告書：海外研修事業編、お茶の水女子大学

戸田利(1993)「外来語に関する基礎的研究－基本外来語の語形を中心に－」『比治山女子短期大学紀要』第 28 号、比治山大学